



TITLE:

(随想)スポーツとファン気質

AUTHOR(S):

赤坂, 裕

CITATION:

赤坂, 裕. (随想)スポーツとファン気質. 泌尿器科紀要 1957, 3(5): 299-300

ISSUE DATE:

1957-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111458>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 3 卷 第 5 号

昭和 32 年 5 月

随 想

スポーツとファン気質

昭和医科大学教授 赤 坂 裕

昨年メルボンで行われたオリンピックでは体操、レスリングなどのようにほぼ予想通りの成績を挙げたものもあれば、やや予想を下廻つたと思われる水泳や、期待はずれの感のあつた陸上競技などあつて、その後、練習方法の善悪など競技に直接関する問題や、夫々の競技団体の組織又は運営の是非に関する問題まで、種々話題が提供されているようである。然しそれ等の問題については、専門家でもない者が新聞面の知識程度でかれこれ云う積りは毛頭ないし、批判する資格もないのであるが、スポーツを愛し、常にスポーツに関心を持つているものとしては、多少の感なきにしもあらずである。

由来日本人は勝敗にこだわり過ぎる傾向があるが、勝敗を争う以上は勝ちたく思うのは当然であり、勝つてもらいたいと思うのも無理はない。然し最善を尽してもなお敗れた場合は全く止むを得ないことであつて、それ以上のことを望むのは無理で、選手自身も悔ゆるところはない筈であり、期待にはずれたからと云つて、結果論的にああだ、こうだと選手やコーチに色々つけちをつけるなどは感心しないことである。

人間誰しも身びいきということはあるもので、選手の最も良い時を標準にして考え勝ちなものである。例えば三段跳の小掛選手の場合であるが、仙台で出した16m48のレコードは昨年度世界最高のものであつて、こういうレコードが常にヒョコ、ヒョコ出せるものではなく、中々出せないものを出したところに価値があるのである。このレコードを見た時、我々は誠に愉快であつた。そして若しかすると優勝出来るかもしれないとの希望を持つたのも確かである。然し必ず勝てると思つたわけではなかつた。ところが一般にはこのレコードを何時でも出せるようになったかに考えて九分通りは優勝と決めてしまつて期待していた人が多かつた。ジャーナリストもあらゆる讃辞を呈し、如何にも優勝は決定的であるかの如きことを報道して、益々優勝するだろうと思ひこませた点もあつた。そして宛も人気俳優か人気歌手かのように大変なお祭り騒ぎで送り出し、さて結果が期待にはずれたとなると、練習が不足であつたとか、コンディションの持つてゆき方が悪かつたとか、コーチが不注意であつたとか、何もかも悪いことづくめで、敗けてけしからんといったような事を云う人が相当数あつたようである。我等の希望などとはやし立てていた人々が、帰国時には甚だ冷い態度で、全力を尽して競技して来た選手に、「何だ、だらしないな」と云わんばかりの仕うちをするなどは、全くお気の毒と云うよりほかはない。然し大衆と云うものは、こういういわば無責任なものなのであろう。

二十数年前、ロスアンゼルスオリンピックの前のことである。当時日本のホープであつた短距離の吉岡隆徳選手が練習中、腎結石の発作を起して東大泌尿器科に入院し、高橋明先生に切石術を受けたことがある。極く最近になつて高橋先生から伺つたのであるが、吉岡選手が入院すると直ちに、全く見ず知らずの多数の人から高橋先生宛に、早く治せ、何時から練習出来るか、元に戻るか、などの希望やら心配やらの投書があり、又中には大切な選手を台なしにすると承知しないぞなどの脅迫まがいの手紙までまいこんだそうである。手術後の経過は至極順調で、予想以上に早く恢復して練習も出来、予定通りオリンピックにも出場して、100m には世界のベストシックスの一人として決勝にまで進出したのである。

さてその後は吉岡選手を称える者はあつても、高橋先生に色々と注文して来た連中の内誰一人として先生に御世話様でしたとか、御苦労様でしたとかの一言さえも云つて来た者はなく、全くそんなことはなかつたかの如くであつた。唯長与又郎先生だけが「君のお蔭だつた。有難う」と云つて下さつたそうである。

まず一般のファンというものはこうしたもののようであるが、スポーツマンに対しては、勝てば官軍、敗ければ賊式の両極端な考え方をせずに、もう少し寛大であつて欲しいものである。選手を英雄視するのもよし、激励するのもよいが、敗れたからと云つてまるで手の裏をかえすように罵詈雑言を浴せる如きことは特にアマチュアスポーツに於ては止めてもらいたいことである。

次に選手自身のことであるが、何時も問題とされるのは、勝つても敗けても涙を流すということである。これを評して勝敗にこだわり過ぎると云うが、僕はそうは思わない。

長い間の苦心鍛練の結果、而も全力を尽して栄の栄冠を得た時は、感激一入のものがあつて思わずも目頭の熱くなるということは不思議ではない。又逆に一敗地にまみれた場合にも、言葉は悪いかもしれないが無念の涙と云つたものが出るのも当り前と云つてよいと思う。只その時の一時の感情の高まりが率直に現れるだけのことで、そう問題にする程のことではなく、むしろ美しい風景と見てよいと思う。勝つても敗けても平然と好敵手を讃え或は慰めることのみが立派だとする考え方には必ずしも賛成は出来ない。勿論こういう態度は好ましいものであるが、たとい涙を流しても直ぐ次にはサッパリと笑顔をもつて相手に対することが出来るならば、何も変るところはないと云つてよいであろう。

只今大日章旗がするすると上つて居りますとのアナウンスと共に国歌が聞えて来た時、思わずグッと胸の熱くなるのを覚えた人も決して少くなかつたと思う。ましてや選手自身誠に感激の一瞬であり、涙が出ても何等不思議はない。競技態度も堂々としており、試合を済んだ後は朗らかに交歓し得るならば、涙を流そうが、流すまいが、それは一時的の事でそれ程問題にすべきことではあるまい。必ずしも勝敗にこだわりすぎる醜態ときめつける必要はないように思われる。こう考えるのは近頃の言葉で云うウェットとドライとの差であろうか。